参考　祇園精舎

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については巻末参照。）

①祇園精舎（ぎをんしやうじや）の　鐘（かね）の　声（こゑ）、諸行無常（しよぎやうむじやう）の　響（ひびき）　あり。②娑羅（しやら）双樹（さうじゆ）の　花（はな）の　色（いろ）、盛者必衰（じやうしやひつすい）の　ことわり　を　あらはす。③おごれ　る　人（ひと）も　久（ひさ）しからず、ただ　春（はる）の　夜（よ）の　夢（ゆめ）の　ごとし。④猛（たけ）き　者（もの）も　つひに　は　滅（ほろ）び　ぬ、ひとへに　風（かぜ）の　前（まへ）の　塵（ちり）に　同（おな）じ。⑤遠（とほ）く　異朝（いてう）　を　とぶらへ　ば、秦（しん）の　趙高（てうかう）、漢（かん）の　王莽（わうまう）、梁（りやう）の　朱异（しゆい）、唐（たう）の　禄山（ろくさん）、これら　は　みな　旧主（きうしゆ）先皇（せんくわう）の　政（まつりごと）に　も　従（したが）は　ず、楽（たの）しみ　を　極（きは）め、いさめ　を　も　思（おも）ひいれ　ず、天下（てんか）の　乱（みだ）れ　ん　こと　を　悟（さと）ら　ず　して、民間（みんかん）の　憂（うれ）ふる　ところ　を　知（し）ら　ざつ　しか　ば、久（ひさ）しから　ず　して、

①祇園精舎（の無常堂）の鐘の音は、諸行無常の（真理を示す）響きがある。②娑羅双樹の花の色は、盛者必衰の道理を表している。③おごりたかぶっている人も（そのおごりが）長くは続かない、まるで（はかない）春の夜の夢のようだ。④勢いの盛んな者も最後には滅んでしまう、ただただ風の前の塵と同じ（ように、はかないもの）なのだ。⑤遠く外国（の例）を調べてみると、秦の趙高、漢の王莽、梁の朱异、唐の禄山、これらは皆もとの主君や前の皇帝の政治にも従わず、歓楽を尽くし、（臣下の）諫め（の言葉）をも考えにいれず、天下が乱れることになるを悟らないで、世の人々が悲しみ嘆くことを知らなかったので、（その栄華が）長続きしないで、滅んでしまった者たちである。⑥身近く本朝（の例）を調べてみると、承平の将門、天慶の純友、康和の義親、平治の信頼、これらはおごりたかぶっている心も勢い盛

亡じ　に　し　者ども　なり。⑥近く　本朝　を　うかがふ　に、　承平
サ変・用｜完・用｜過・体｜断・終｜形ク・用｜格助・対象｜八四・体｜接助・単接

の　将門、天慶　の　純友、康和　の　義親、平治　の　信頼、
格助・体修｜格助・体修｜格助・体修｜格助・体修

これら　は　おごれ　る　心　も　猛き　こと　も、皆　とりどりに
代｜係助・区別｜ラ四・已｜存・体｜係助・列挙｜形ク・体｜係助・列挙｜副｜形動ナリ・用

こそ　あり　しか　ども、間近く　は　六波羅の入道前太政大
係助・強意(係)｜補動・ラ変・用｜過・已(流れ)｜接助・逆確｜形ク・用｜係助・区別

臣　平朝臣清盛公　と　申し　し　人　の　ありさま、
格助・引用｜サ四・用(謙)語り手→清盛｜過・体｜格助・体修

伝へ承る　こそ、心　も　言葉　も　及ば　れ　ね。
ラ四・体(謙)語り手→清盛｜係助・強意(係)｜係助・列挙｜係助・列挙｜バ四・未｜可・未｜打・已(結)

んなことも、皆それぞれ（に甚だしいもの）であったけれども、近頃では六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公と申し上げた人のありさまは、伝え聞くにつけても、想像も（言い表す）言葉も及ぶことができない（ほどのすさまじさな）のである。

指導上の注意点と発問例

● 九四ページ

問 **「諸行無常」（2行目）とは、どのようなことか。**

答 あらゆるものは生滅し、永遠に変わらないものはないというこの世のありさま。

補 「盛者必衰」「おごれる人も久しからず」「猛き者もつひには滅びぬ」なども同じ意味を表している。

問 **冒頭の二文「祇園精舎の鐘の声、…。娑羅双樹の花の色、…。」（2行目）はどのような音律上の特徴があるか。**

答 七五調の調子よいリズムとなっている。

問 **「祇園精舎の鐘の声、…ひとへに風の前の塵に同じ。」（2行目）について、**
[中]この部分から、対句表現を指摘せよ。
[難]対句表現の効果を二点あげよ。

答 2　1
[1]「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。」と「娑羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらはす。」「おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。」と「猛き者もつひには滅びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。」[2]文章の調子を整え、リズム感を出す。繰り返しにより思想を強調する。

問 **「盛者必衰のことわり」（2行目）を分かから成り立っている。A・A′によって、仏教的無常のことわりを繰り返して強調し、B・B′によって、その真理の顕現である歴史的事実の一般化を繰り返して指摘している。そしてさらに異国の歴史、本国の歴史、とクローズアップしていき、最も近い清盛一門に焦点をあてていく。文が進むごとに、仏教的思想が徐々に歴史的に具体化していくような構造になっている。**

語句の研究

● 九四ページ

2 祇園精舎　「祇園」は祇樹給孤独園（ぎじゅぎっこどくおん）の略。西暦前五世紀の頃、中インドの舎衛国（しゃえ）波斯匿王（はしのく）の太子祇陀（ぎだ）が所有していた園であったが、釈迦に深く帰依した長者須達多（すだった）が買い、園内に堂宇を造り、釈迦に献じた。「精舎」は精練行者のいる所、すなわち、僧院のこと。釈迦は、前後二十五年ここに住んで、中インド地方に法を説いた。現在のウッタル・プラデーシュ州にある、サヘート・マヘート遺跡がこれであると言う。「祇園精舎の…塵に同じ。」の文章は、調子のよいリズムが感じられるが、これは七五調を基調とする音数律によってリズム感が生まれているからである。冒頭は、七・五を四回繰り返す今様の形式そのもので、それを「…あらはす。」と受けて、「おごれる…ごとし。」が、七・六・七・六と、ややゆったりした口調で散文に近づけている。対句は、A「祇園精舎の…響きあり。」とA′「娑羅双樹の…あらはす。」、B「おごれる…のごとし。」とB′「猛き…に同じ。」というように、この段全体が二組の対句表現

2 鐘の声　祇園精舎の無常堂にあったという鐘の音。病んだ僧をこの無常堂に入れて死を迎えさせると、堂の四隅にある鐘が鳴って、「諸行無常」の偈（げ）（経文のうちに含まれている短句）を説くと言われ、病僧はこれを聞いて、苦悩が消え、清涼の楽を得て浄土に往生したと言う。「祇園図経」に詳しい。

2 諸行無常　「諸行」は、因縁によって生じ、過去・現在・未来を環流する全ての現象。万物。「諸行無常」は、有名な偈「諸行無常（ニシテレ）、是生滅法（ノナリ）、生滅滅已（シをハリテ）、寂滅為楽（ナルヲスト）」（「涅槃経（ねはんぎょう）」聖行品（しょうぎょうぼん））の第一句。平家の作者は、無常堂の鐘の音を「寂滅為楽」の悟りの声とせず、「諸行無常」の無常の声と受け取っており、これをテーマとするという

問 **答** **りやすく現代語訳せよ。**
勢い盛んな者も必ず衰えるという道理。

問 **答** **「おごれる人」（3行目）とは、どのような人か。**
時勢に任せて勝手なことをする人。

補 **答** 「おごる」は「権勢を誇る」の意。

問 **補** **答** **「春の夜の夢」（3行目）とあるが、どのようなことのたとえか。**
短く、はかないこと。

補 **答** 「風の前の塵」も同じ。すぐ吹き飛ばされてなくなってしまう。

問 **答** **右と同じ意味の比喩表現を抜き出せ。**
風の前の塵

問 **答** **「遠く異朝をとぶらへば」（4行目）について、**
① この部分に対応している部分はどこか。
② 「とぶらふ」とは、どのような意味か。

答 ② [1]近く本朝をうかがふに　[2]問い聞く、調べる。

問 **「知らざつしかば」（7行目）を文法的に説明せよ。**

答 「知らざりしかば」の促音便形。「知ら」はラ行四段動詞の未然形。「ざり」は打消の助動詞「ず」の連用形で、促音化している。「しか」は過去の助動詞「き」の已然形。「ば」は順接の確定条件（原因・理由）を表す接続助詞。

作者の姿勢が読み取れる。

2 娑羅双樹　「娑羅」はインドに産する高木。淡黄色の小花を開く。釈迦入滅のとき、その床の四方に一双ずつ八株あったのを「娑羅双樹」と言う。「涅槃経」によると、釈迦の死に感応して、東西の二双が合して一樹となり、南北の二双もまた一樹となって、釈迦を覆い、花はことごとく白色に変じたと言う。これについては、「淡黄色の花が白色に変わった」と「木が白くなって枯れた」の二通りの解釈があるが、「平家物語」では花としている。

2 盛者必衰のことわり　「仁王経」護国品にある句。「盛者必衰、実者必虚」とある。「祇園精舎の鐘」と「娑羅双樹の花」の仏教故事は、源信の「往生要集」によって我が国に伝えられ、唱導などを通じて普及し常套化していったものであろうが、「諸行無常」同様、「娑羅双樹の花」も、元来は「生者必滅」とあるべきところを人間の娑婆世界の栄枯盛衰に焦点を置く歴史語りの序章としての配慮から、このような表現になったのであろう。

3 久しからず　「ず」の活用形は「久しからず」と「滅びぬ」とが対句として対応しているところから終止形と判断する。ここは、終止形の中止法的用法で、終止形で言い切れない感じが「…ということで、それは…（のごとし。）」と下文に続いている。

3 春の夜の夢　「風の前の塵」と共に、はかないものの例え。「往生講式」に「朝開ニ栄華一、暮随ニ無常之風一、宵翫ニ朗月一、曙隠ニ別離之雲一、一生是風前之燭、万事皆春夜夢」とある。

3 猛き者　「猛し」は「勢いが盛んだ、勇ましく強い、勇猛である」などの意。

5 秦の趙高　秦の始皇帝の死後、丞相李斯を殺し、二世皇帝を擁立して横暴を極めたが、三世皇帝子嬰のとき誅せられた。「史記」秦始皇本紀に見える。「秦」は中国春秋戦国時代の大国。前三一年〜前二六年。戦国の列国を滅ぼして天下を統一したが、三代十六年で漢の高祖に滅ぼされた。

5 漢の王莽　前漢孝元皇后の甥。平帝の后の父。孺子嬰を立てて国政をほしいままにし、後、嬰を廃して、自ら帝を称し国号を「新」と改めたが、十八年で諸侯に殺された。「漢書」九十九に見える。「漢」は、ここでは前漢を指す。前漢は、秦の滅亡後、項羽を倒して漢王劉邦が建てた国。十四代

問　**「心も言葉も及ばれね。」（11行目）とあるが、「心」はここではどのような意味か。**

答　想像

補　全体の意味は「想像することも言葉で説明することもできない」となる。「れ」は可能の助動詞「る」の未然形。「ね」は打消の助動詞「ず」の已然形で、上の「こそ」の結びとなっている。

問　**右は、誰の、どのような様子か。**

答　平清盛の、おごり高ぶった様子。

問　**異朝の人や本朝の人を例示した後、平清盛を出したのはなぜか。**

答　あらゆる歴史的人物たちより、平清盛のほうがひどかったとし、清盛を強調し、読者の興味を引くため。

問　**「平家物語」が「平曲」とも呼ばれるのは、なぜか。**

答　琵琶の伴奏により語られたため。

二百十四年。前三六年～後八年。

5梁の朱异　梁の武帝の寵愛を得て国政を専断した。河南侯景の使者が来たとき、諸臣の反対を押してこれを入れ、大将軍としたが、景が背くに至って、武帝は敗死し、朱异は自殺した。「梁書」三十八に見える。「梁」は中国六朝の国の一つ。武帝が斉の帝位を奪って建国した。六代五十六年。五〇二年～五五七年。

5唐の禄山　西域出身の胡人で、玄宗皇帝・楊貴妃に寵愛され、平盧・范陽・河東の節度使を兼ねて軍事の権を握った。後に、いわゆる安禄山の乱（七五五年）を起こし、自ら大燕皇帝を称したが、我が子慶緒に殺された。「唐書」二百十五に見える。「唐」は隋に続く統一王朝で、李淵の建国になる。二十代二百九十年。六一八年～九〇七年。

5旧主先皇の…知らざつしかば　内容上二つに分けると、「旧主先皇の…思ひ入れず」と「天下の…知らざつしかば」とに分かれる。前半は、これらの四人が権力の簒奪者で、おごりを極めて横着非道な者たちであったことを述べ、後半は、その結果としてもたらされる社会の混乱や人々の苦難に対して全く関心がなかったことを述べて、前後相まって、「久しからずして、亡じにし」という結末になったとしている。冒頭でも、「諸行無常」「生者必滅」という仏教的真理を、「盛者必衰」という歴史の必然の方向に転換させているが、ここではさらに、非道な権勢におごった者が滅んでいくというように、歴史上の現象に近づけた論旨となっている。

8承平の将門　平将門。高望王の孫。鎮守府将軍良将の子。親族間の争いから、ついに承平五（九三五）年常陸・下総で乱を起こし、新皇を称したが、天慶三（九四〇）年藤原秀郷らによって討たれた。「将門記」「今昔物語集」二十五などに詳しい。「承平」は朱雀天皇の年号。九三一年～九三八年。

8天慶の純友　藤原純友。大宰少弐良範の子。伊予掾の任期が過ぎても帰京せず、将門の乱と同じ頃瀬戸内海を荒らしたが、天慶四（九四一）年小野好古に追討され、橘遠保に殺された。「純友追討記」「今昔物語集」二十五などに詳しい。「天慶」は朱雀天皇の年号。九三八年～九四七年。

8康和の義親　源義親。義家の子。康和年間、九州で乱を起こし隠岐に流されたが、途中出雲で再び乱を起こし、嘉承二（一一〇

七）年平正盛（たいらのまさもり）に追討され、翌年殺された。「康和」は堀河天皇の年号。一〇九九年～一一〇四年。

8平治の信頼　藤原信頼（ふじわらのの）。忠隆（ただたか）の子。後白河法皇の近臣として権勢を振るい、藤原信西と対立、源義朝（みなもとのよしとも）と結んで平治元（一一五九）年兵を挙げたが、平清盛らに敗れ、六条河原で殺された。「平治物語」に詳しい。一一三三年～一一五九年。「平治」は二条天皇の年号。一一五九年～一一六〇年。

9みなとりどりにこそありしかども　この逆接を受けるべき内容は、「おごれる心も猛きことも」長く続くことなく亡びたとなるはずだが、それを言わずに、「間近くは、…」と、平清盛のありさまに続いており、形の上ではよじれた文になっている。ここは、冒頭の「おごれる」（九四・3）「猛き」（同・3）をそのまま使っているので、それゆえに「異朝」の驕臣逆臣たちは「久しからずして、亡じにし」と結論づけたのを暗示したことになるのであろう。つまり、「久しからずして、亡じにし者どもなり。」という述部を、「本朝」の四人についても響かせている文脈とみることができよう。

10六波羅の入道　「六波羅」は、京都鴨川の東、現在の東山区轆轤（ろくろ）町六波羅蜜寺付近で、この辺に清盛は邸を構えていた。「入道」は出家して仏道に入ること、また、その人。清盛は仁安（にんあん）元（一一六六）年、病のため出家して、浄海と称した。なお、「入道」の語は、日本では出家までを意味することなく、何らかの理由で、剃髪して仏道に帰依したことを表すだけを言う場合があり、この場合もそれである。

10前太政大臣　清盛は仁安二（一一六七）年二月太政大臣（太政官の長官）になり、同年五月辞した。そのため「前太政大臣」と言う。

10平朝臣清盛公　桓武平氏のうち、いわゆる伊勢平氏の忠盛の子。父の築いた中央での地位と財力とを継ぎ、保元・平治の両乱に勝ち抜き、後白河天皇の院政と結び付いて急速に昇進し、ついに従一位太政大臣にまで達した。こうして、武力を背景とし、全国の半ばに及ぶ三十の知行国、五百余の荘園、対宋貿易の巨利を基盤とする、いわゆる六波羅政権を樹立した。しかし、一門の繁栄をはかるのに急なあまり、貴族・寺社などの旧勢力との対立を深め、一方貴族化して諸国の武士の支持を失い、その政権の力が傾き始めた頃、各地の源氏の蜂起を見ながら死んだ。

「朝臣」は上代の姓（かばね）の一つであるが、ここは、単なる敬称として用いられるようになった用法である。その場合は、三位以上の人に対しては氏の下に用いて名を言わず、四位の人に対しては氏と名との間に入れ、五位の人に対しては氏名の下に用いるのを例とした。「公」は、太政大臣・左右大臣を三公と言い、これに任じた人への敬称。

10伝へ承るこそ　この部分のセンテンスの構文は、「六波羅の…ありさま」が主部で、「心も…及ばれね」が述部であり、「伝へ承るこそ」は連用修飾句である。

11心も言葉も及ばれね　「れ」は可能の助動詞「る」の未然形。「ね」は、打消の助動詞「ず」の已然形で、「こそ」の結び。

鑑賞

この祇園精舎の一節は、美しい対句仕立ての名文句で書き始められており、その旋律に乗る哀感は、「方丈記」冒頭「ゆく河の流れ」の一節と並び、中世文学の書き出しの双璧と言われる。冒頭に「諸行無常」と「盛者必衰」の二つの仏教思想を提示し、これを「春の夜の夢」「風の前の塵」といった比喩を使って敷衍し、さらに、この思想を古今東西の歴史的な事例の列挙によって、実証してみせるという構成になっており、その史上人物の最後に、この物語の中心人物、平清盛を登場させ、その栄枯盛衰の運命を語り出すという、巧妙な導入の手法を取っている。この重層的な論旨の展開は、仏教の説法・唱導の導入の手法を踏襲したと言われるが、ここに、この物語の持つ仏教的基盤が見られよう。この一節を、「方丈記」の一節と対比させると、そこで描かれようとしている世界にはかなりの開きがある。石母田正氏は、「方丈記」の作者の特質が、自己反省的、内面的、道徳的であるのに比して、「平家物語」の作者の目は絶えず外の世界へ向かっているとして、それを歴史や運命に対する対応の姿勢や資質の違いとして捉えている。永積安明氏によると、「平家物語」の序章の文体は、今様風の七五調による詠嘆的な表現と言われながらも、中に四句韻文体の偈頌形式を踏まえ、それが流れがちな和歌的叙情を断ち切り、知的で反省的な切り替えを導き出しており、「方丈記」のように無常観の中に停滞し、情緒的表現に収斂されることを防ぐ結果になっていると言う。「平家物語」全体の骨組みの中で、巻頭の文章を、その理想的、世界観的側面をより重視するか、または叙事文学的、歴史的側面をより重視するかで、その評価は分かれる。全般的には、小林秀雄氏が序章の無常思想を「時代のはかない意匠」として否定し、「平家のあの冒頭の今様風の哀調が、多くの人々を誤らせた。平家の作者の思想なり人生観なりが、其処にあると信じ込んだが為である。（中略）一種の哀調は、この作の叙事詩としての驚くべき純粋さから来るのであって、仏教思想といふ様なものから来るのではない」と述べて、この作品の持つ叙事詩性を強調して以来、叙事文学的側面への関心が深まりつつある。こういった論議については、冨倉徳次郎氏の、「『平家物語』の基調には、この仏教文学的なものもあるが、また現実主義的な叙事文学としての現実凝視の精神もあるのであって、その二つの融合が注意せられて読まれていい」とする見解が一つの参考になろう。

この巻頭の一節の典拠としてよく指摘されるものの一つは、「涅槃和讃」の、

跋提河の波の音、生者必死を唱へつつ、娑羅双樹の風の声、会者定離を調ぶなり。祇園の鐘も今更に、諸行無常と響かせり。

であり、他の一つは、「梁塵秘抄」巻二の、

迦葉尊者は石の室、祇園精舎の鐘の声、醍醐の山には仏法僧、鶏足山には法の声。

である。これらは共に、当時の人の多くに何らかの形で親しい詩句であったわけで、「平家物語」の作者は、これらから得たイメージによって「諸行無常」という認識を形象化したのである。この当時の人々の一般的感慨と言えるものによって、これから展開する平家興亡の哀れを弔う言葉としたわけである。